

日韓の深淵—盧泰愚さんの時代③

立命館大学コリア研究センター上席研究員 波佐場 清

1. 捏造の「歴史」を注入

日本は植民地朝鮮の子どもたちに学校で何を教えていたのか。「修身科」と並び「皇国臣民」化教育の重要な教材の一つだった「歴史」教科書はどのようなものだったのか。

東京の「あゆみ出版」が1985年に刊行した復刻版『朝鮮総督府編纂教科書』（全66巻）の中から朝鮮人児童用の『普通学校国史』（上、下巻2冊）を取り出してみる。1922年（大正11年）の朝鮮教育令（第2次）の下、朝鮮総督府が普通学校用に初めて作った歴史教科書だった。それまで普通学校の教科に「歴史」はなかった。

めくってみると、上、下巻とも巻頭に歴代天皇の名と「皇紀」で示された在位期間が列記されている。目次は天照大神、神武天皇に始まり、天皇の名が頻出する。ところどころに「新羅統一」や「朝鮮の太祖」といった朝鮮に関する項目もある。

■皇国史観

内容はどうだったのか。戦後、朝鮮史研究をリードした歴史家、旗田巍さん（1908～94）が次のような分析をおこなっていた。

▼『普通学校国史』は日本人児童用の国定『尋常小学国史』の全文を収録し、それに若干の朝鮮史に関する教材を加えていた。そこでは朝鮮は古くから外国の属国になり、自立できない国なので天皇の恩沢によって忠良な日本臣民として生きるべきだと説いた。

▼登場してくる天皇はみな英明で国を憂い国民をいつくしむ君主だ。天皇を中心に日本の歴史を考え、天皇の盛徳と天皇への国民の忠誠が日本の歴史を発展させる原動力だとする皇国史観であり、それを日本人児童同様、朝鮮人児童にも注入した。

■神功皇后の「三韓征伐」

皇国史観は対外侵略を「国威の発揚」として美化した。一例として、神功皇后を見る。古事記や日本書紀に登場し、神のお告げで朝鮮を攻めて「三韓征伐」をしたとされる人物だ。明治政府発行の肖像入り紙幣に第1号の人物として採用されてもいた。

普通学校国史は朝鮮半島の地図と挿絵入りで、次のようなことを書いている。



『普通学校国史』に載った神功皇后の挿絵＝復刻版より

▼仲哀天皇の皇后、神功皇后は天皇と共に熊襲の平定で九州に行ったが、途中で天皇が亡くなった。そのころ、朝鮮には新羅・百済・高麗 [高句麗] の「三韓」があり、新羅の勢いが最も強かった。

▼皇后は新羅を従えれば熊襲は自ずと治まると考え、兵を率いて新羅を討った。紀元 860 年 [西暦 200 年] のことだった。皇后は出発前、海水で髪を男のように結び、軍船を連ねて新羅に押し寄せた。

▼新羅王は大いに恐れ、「東の方角に神国があり、天皇というすぐれた君主がいると聞く。これは日本の神兵に違いない。どうして防ぎ得ようか」と直ちに降参し、「毎年の貢ぎ物は怠らない」と誓った。やがて、百済と高麗も日本に従った。

▼こうして朝鮮は天皇の徳になびき、熊襲も治まった。次の応神天皇の代に王仁という学者が百済から来て学問を伝えるなど、日本がますます開けていったのは神功皇后の手柄によるものであった。

■卑弥呼をモデルに歴史捏造

この物語は史実に反し、日本側で勝手に作り上げた虚構であった。東京大学の小島毅教授（1962 年生まれ）は著書で、「神功皇后は卑弥呼をモデルに造形された。隣国をひれ伏させたとすることで、記紀が編纂された 7 世紀後半の国際情勢のなかで、ずっと昔から日本が韓国（当時は新羅）より上位にあるのだという歴史を捏造した」と、次のように指摘する。

▼中国の歴史書『三国志』の「魏志倭人伝」は、西暦 239 年、倭の邪馬台国の女王卑弥呼が魏の皇帝とよしみを通じたことを記述している。日本書紀の編集者たちはそのことを知っており、中国の史書を無視することはできなかった。

▼そこで、卑弥呼と神功皇后の合体が行われた。神功皇后伝承自体、卑弥呼をモデルに創造されたのかもしれない。日本書紀には、中国の史書と一致させようとする努力がうかがえる。日本書紀と三国志を比較すると、神功皇后と卑弥呼は時代が重なる。

▼日本書紀は無理につじつまを合わせようとし、実際には二代にわたった邪馬台国の女王の治世を神功皇后一代の話にしている。結果、神功皇后の息子の応神天皇は母親の摂政によって70歳まで即位できず、神功皇后も100歳で亡くなったことになっている。

小島教授は、この「三韓征伐」は、明治初年の「征韓論」にも影響を与えた、と次のように指摘する。

「『征』という字は、上に立つ者が下の者の間違っただけの行為を懲らしめる、という意味を持っている。しかも当時、この隣国の正式な国名は『朝鮮』であり、『韓』ではなかった。それなのに『征朝』でなく『征韓』なのは、明治政府が神功皇后の三韓征伐を意識していたからだろう」

■朝鮮を見下げた記述

朝鮮を見下げた記述は神功皇后だけではなく、豊臣秀吉についても「皇室を尊び人民を安んじ、外征の軍を起こして国威を海外にかがやかした」などとしている。征韓論や日清・日露戦争、韓国併合も美化している。旗田魏さんは次のように書いている。

「注目すべきは、これらの侵略が主として朝鮮を対象に行われたことである。こういう教科書を読まされた朝鮮人児童は一体どんな気持ちがあったであろうか。…当時の普通学校に通ったある朝鮮人の話によると、一番嫌いな授業は歴史の授業だったというのが、当然のことと思う。しかし日本は、朝鮮人の気持ちを無視して、こういう教科書を強引に押しつけたのである」

皇国史観を注入する教育は1938年の朝鮮教育令改正（第三次）でいちだんと強化された。盧泰愚さんらはそんな中で、天皇に忠義を尽くす「大日本帝国臣民」たるべく、東方遙拝や神社参拝を強いられ、「皇国臣民の誓詞」を唱えさせられていたのである。

■癒えない歴史の傷痕

植民地朝鮮が日本の支配から解放されて76年になる。この間、韓国側から発せられた天皇をめぐる発言がしばしば日韓関係を揺さぶってきた。

2012年8月、時の李明博大統領（1941年生まれ）が日本と領有権を争う日本海の竹島（韓国名・独島）に突然、上陸して物議をかもした。慰安婦問題をめぐる日本政府への反発が直接の引き金だったとみられが、そのさい、「天皇が訪韓したいのなら、独立運動で亡くなった人を訪ねて謝罪すればいい」と息まき、波紋を広げた。

2019年2月、韓国の文喜相・国会議長（当時、1945年生まれ）は慰安婦問題に絡み、米ブルームバーグ通信のインタビューに次のように答えたと報じられた。

「（謝罪は）一言でいいのだ。日本を代表する首相か、間もなく退位される天皇〔現上皇〕が望ましいと思う。その方（天皇）は戦争犯罪に関わった主犯の息子ではないですか。（被害者の）おばあさんの手を握り、申し訳なかったと言えれば、問題は解決する」

安倍首相（当時）ら日本側が激しく抗議すると、文議長は「なぜ、このように大きな問題になるのか、到底理解できない。被害者から『許す』という言葉が出るまで謝罪しろということだ」「謝罪する側が謝罪せず、私に謝罪しろとは何事か。盗人猛々しい」と猛反発したのだった。

歴史の傷痕は深く、いぜんとして十分に癒されていないようにみえる。

* 参考文献

旗田巍「朝鮮人児童に対する朝鮮総督府の歴史教育——第二次朝鮮教育令下の歴史教科書」旗田魏監修『日本は朝鮮で何を教えたか』あゆみ出版、1987年

中塚明『これだけは知っておきたい 日本と韓国・朝鮮の歴史』高文研、2002年

小島毅『父が子に語る日本史』ちくま文庫、2019年

小島毅『父が子に語る近現代史』ちくま文庫、2019年

2. 大統領として天皇と向き合って…

盧泰愚さんの少年時代に戻りたい。1945年春、国民学校を卒業した盧少年は中学校へ進んだ。『回顧録』は次のように書いている。

▽凶作と貧困

国民学校6学年の同級生105人のうち中学に進学したのは私を含め4人だけだった。みな貧しかった。

光復（解放）の前年、故郷は厳しい凶作に見舞われた。何カ月も雨が降らなかった。水利施設がなくて田植えができず、人々はアワを植えた。アワのごはんすらまともに食べられず、少しばかりのアワに、乾かした豆の葉っぱが入った水っぽい粥がせいぜいだった。

村の人たちが土気色にむくんだ顔で生き延びるためにマツの皮なりと剥いで食べようともがいていた光景が今もありありと目に浮かぶ。

私は中学に行けるような家庭環境ではなかったが、満州で稼いだ叔父が学費を出してくれたおかげで進学できた。

この地方随一の名門、慶北中学を受験して失敗。大邱工業学校に進んだ、その夏、解放を迎えた。その日のことを次のように書いている。

▽8月15日

1945年8月15日、飛行場近くで防空壕を掘っていると、突然「家に帰れ」という。「どうして？」と思いつつ喜んで帰った。夕方、日本の降伏を知った。正午に天皇の肉声で「無条件で降伏する」との放送があったのだという。日本人の先生は「米軍が日本本土に上陸したとしても竹槍で退ける」と豪語していたのではなかったか。

街では愛国歌が歌われ、太極旗が翻った。独立運動の志士、李承晩博士や金九先生が帰国されるといううわさが聞こえてきた。胸を張って暮らせる国になるように思えた。

工業学校に3年間通ったあと慶北中学校に編入。6学年に進級した1950年6月25日、朝鮮戦争が起き、勉強どころではなくなった。学徒兵として志願するか、召集を待つか……。結局、憲兵学校から陸軍士官学校（陸士）へと進み、軍人になったのだった。

■激動の中、大統領就任

それから30年の歳月をへて1980年代初め、盧泰愚さんは政治家に転身した。同郷、陸士同期の全斗煥政権下だった。80年代後半、内外情勢は大きく動いた。グローバルな冷戦体制が崩壊に向かい、韓国内では87年、怒涛の民主化運動が政権を追い詰めた。

与党の大統領候補になった盧泰愚さんは急遽、大統領選を間接選挙から直選制に改める改憲を「民主化宣言」

で約束し局面を打開、野党・民主化勢力の分裂にも助けられてその年暮れの大統領選を勝ち抜いた。

88年2月、大統領就任。南北和解を掲げて果敢な北方外交を推進し、国内ではソウル五輪後に韓国民の海外旅行全面解禁に踏み切った。民主化は急進展し、封じ込められてきた歴史清算要求も一気に噴出し始めた。そんな時期、盧泰愚大統領は90年5月24～26日、日本を訪問した。

■「おことば」問題浮上

訪日にあたり、天皇（現上皇）の「おことば」問題が大きく浮上した。韓国側が、過去の植民地支配に絡み、天皇が大統領を迎えて開く宮中晩餐会で、加害者の立場からはっきりと謝罪することを要求、日本側に強い反発が起きた。

今年3月、韓国外務省は31年前の外交文書を公開、当時のいきさつが明らかになった。盧大統領の訪日に際し韓国側は、84年の全斗煥大統領訪日時に昭和天皇が表明した内容を上回る「より具体的で強いおわび」を求める方針を決めていたのだった。

全大統領の訪日時、昭和天皇は「両国間に不幸な過去が存したことは誠に遺憾」と述べたが、韓国側には「謝罪の主体などがはっきりしない」との不満が強かった。韓国側は、新たな「おことば」の内容によっては盧大統領の日本滞在中に天皇の訪韓を招請することも決めていた。

盧大統領の訪韓を前に、外交交渉はぎりぎりまで続いた。5月14日、盧大統領はソウル駐在の日本メディア特派員との会見で「天皇は加害者の立場ではっきりと謝罪しなければならない」と言明。翌15日、韓国政府は「天皇の謝罪表明を大統領訪日まで要求し続ける」と発表した。

■1歳違い

1990年5月24日、盧泰愚大統領は予定通り、国賓として日本を公式訪問した。赤坂迎賓館での歓迎行事のあ

と、大統領夫妻は皇居で天皇皇后と会見。双方は、大統領が天皇より1歳年上であることや、お互いの趣味であるテニス談議に花を咲かせた、と報道された。



青瓦台 HP 天皇皇后と会見する盧泰愚大統領夫妻 1990年5月24日

1歳違い——1933年12月生まれの天皇と、32年12月生まれの大統領。振り返ってみると、少年時代、大統領が植民地下、片道6キロの山道を通った国民学校で「私共は心を合わせて天皇陛下に忠義を尽くします」と唱えさせられていた時、天皇は皇太子として学習院初等科で「帝王学」を学んでいたのだった。

天皇との会見で、盧泰愚大統領の脳裏をめぐったものは何だっただろうか。

■「痛惜の念」

夕方、海部俊樹首相との第1回首脳会談のあと、宮中晩餐会。天皇はここで、次のような内容を含む「おこと

ば」を述べた。

「朝鮮半島と我が国との長く豊かな交流の歴史を振り返るとき、昭和天皇が『今世紀の一時期において、両国の間に不幸な過去が存したことは誠に遺憾であり、再び繰り返されてはならない』と述べられたことを思い起こします。我が国によってもたらされたこの不幸な時期に、貴国の人々が味わわれた苦しみを思い、私は痛惜の念を禁じえません」

盧泰愚大統領は次のように答えた。

「歴史は、真実が消されたり忘れ去られたりしてはなりません。しかし、いつまでも過去にしばられているわけにはいきません。正しい歴史認識に基づいて間違った過去を洗い流し、友好協力の新しい時代を開かなければなりません」

盧大統領は、口頭で天皇の韓国訪問を招請した。

■「真実に基づいた理解を」

翌5月25日、盧大統領は衆議院本会議場で演説をおこなった。日本の国会での演説は、韓国大統領としては初めてのことだった。ここでは、本稿のはじめの部分で紹介したように「母親から直接覚えた自分の国の言葉を使ったからといって先生に鞭打たれた」などと少年時代をしんみりと振り返りながら、次のようにも語りかけた。



青瓦台 HP 国会で演説する盧泰愚大統領 1990年5月25日

「過去の暗かった時代、私たちの民族が味わった、それ以上の大きな苦痛や試練、そのとてつもない悲劇についていま、ここで語る必要はありません。私たちは国を守ることができなかった自らを反省するのみで、過ぎ去ったことを反芻して誰かのせいにしたり恨んだりしようとは思いません。私が申し上げたいのは真実に基づいた両国民のしんからの理解であり、それを土台に明るい未来を開いていこうということです」

「過ぎ去ったことは神であっても変えることはできません。歴史とは、今日の私たちが過去をどのように見、どう理解するかという問題です。いま、私たちのやりようによっては過去のくびきを断ち、その残滓を片付けることができるのだと思います。私たちみんなの勇気と努力が必要なだけなのです」

韓国大統領記録館 HP (<http://www.pa.go.kr/research/contents/speech/index.jsp>)

盧大統領は5月26日、帰国。韓国民への報告で「日本がどんなに謝罪しても、それが不十分なものであり、

暗い時代を忘れられないだろうが、日本側が過ちを率直に認め反省、謝罪した以上、我々はそれを広い心で寛大に受け入れ、善隣友好の新時代をつくっていかねばならない」と説いた。

■日韓閉塞

盧泰愚大統領のこの訪日から、もう 30 年余がたった。日韓関係は盧泰愚さんが思い描いたようには進んで来なかった。訪日翌年の 91 年、慰安婦問題が浮上。「天皇訪韓」はどこかに消え、過去清算問題は元徴用工などにも広がって、両国関係はいま、閉塞状態に陥っている。

盧泰愚さんはソウルで長い闘病生活の末に今年 10 月 26 日、永眠した。日韓関係のその後の展開といまの状況は、盧泰愚さんの目にどう映り、その思いはいかようなものであったろうか。(おわり)

立命館大学コリア研究センター上席研究員 波佐場 清

*参考文献

小島毅『父が子に語る日本史』ちくま文庫、2019 年

小島毅『父が子に語る近現代史』ちくま文庫、2019 年

趙世暎（姜喜代訳）『日韓外交史 対立と協力の 50 年』平凡社新書、2015 年

中塚明『これだけは知っておきたい 日本と韓国・朝鮮の歴史』高文研、2002 年

旗田巍「朝鮮人児童に対する朝鮮総督府の歴史教育——第二次朝鮮教育令下の歴史教科書」旗田魏監修『日本は朝鮮で何を教えたか』あゆみ出版、1987 年